

# 翻刻・俳書『雲米与之野』

本書は、幕末の豊後で生まれた小冊の俳諧書である。編者三名の共編による私家版で、刊行には上方の書肆が関わったであろう。疑北・翠々・石友の三名の発起により、万延二年（一八六一）一月十七日、豊後国海辺郡吉野里天満宮の臥竜梅（大分市南端の萩尾に現存）の下で観梅の雅遊が営まれた。参加者は、七名の従僕も加える総勢三九名、その行遊記念の作品集なのである。外題の「雲米与之野」が「梅吉野」の意であるのは、言うまでもあるまい。まず、書誌を記す。

半紙本一冊。水浅葱色小菊文様押形入り表紙。題簽中央無辺。表と裏の見返しは枯色の紙。全一五丁。柱刻「二」く「十五」。各面の四周の匡郭は角を曲線にし、十五丁目裏の左縦線に「豊後大分郡花儒松筠七香三園合梓」の刊記を挟み込む。刊記の脇に



図1

田中道雄

菱形様の「一外」の朱印（陽刻）があり、表の見返しには「第三十号」の墨書がある。あるいは大西一外の旧蔵書か。架蔵。

ご覧のような小俳書だが、私はこの書につよく惹かれるものがあり、それが契機となって郊外散策の問題を論じたことがある。拙著『蕉風復興運動と蕪村』（岩波書店、二〇〇〇年）の第三章である。従って、ここで本書について多少はふれたが、この度やはり、全文を紹介しておきたいと思うのである。

本書の魅力は、独特な内容編成からもうかがえる。

口絵・巻頭言・回章（雅遊開催の趣意を述べた案内状）・行楽記（序文を兼ねる）・作品・色刷り挿し絵（四面）・作品・跋文・出杖名録（参加者名簿）

回章と行楽記が特に収められており、しかも内容は甚だユーモラスに綴られている。口絵は朱・薄墨を加えた三度刷り、三顆の朱印は手捺しだろう。挿し絵は見開きの二点というより、連続した一点と考えてよい。墨・薄墨の他に朱色・淡い朱色・水浅葱色・淡い水浅葱色・芥子色・淡い木賊色が認められ、少なくとも五回以上の刷り



田中眞樹

図2

である。主催者の一人である石友の作で、華やいだ楽しい雰囲気を出している。また、巻末の出杖名録も甚だ珍しい。俳書に俗名を記すのは全く見ないではないが、本書のように名録として掲出する例はきわめて稀である。俳人の素性を知るうえで、何よりの好資料となる。

○ ここで、その名録を手がかりにして調査した、主要俳人の社会的帰属の在り様を報告する。まず、編者の三人から始めよう。見返しの、華儒園・松筠園・七香園の順序は刊記でも変わらないから、それぞれが、回章の末に記す疑北・翠々・石友に当たる、と考えてよいであろう。そのことは、回章の記事からも裏付け得る。

**疑北** 安東元達。名晋、字裕郷、花儒園・青海・杲齋・小桃源漁夫などとも号する。大分郡雄城村（現、大分市玉沢）の庄屋の家に生まれた医師。文政八年（一八二五）八月十六日生、明治二十八年六月二十八日没。行年七十一歳。その屋敷跡と言われる地に顕彰碑（トキハわさだタウン北側の道路に南面。幅約一メートル、高さ台座共約二メートル）が立つので（図1）、全文を次に記



図3

してみる（句読点を補った）。

疑北安東先生碑

先生名晋、字裕郷、通称元達、疑北其号也。別有、花儒園・青海・杲斎・小桃源漁夫等之号。豊後植田人也。安東貞安長子、文政八年八月十六日生。家世為雄城村々正。祖父宥作、別架一戸、以医為業、伝至于先生。先生初、從竹内豊州、修漢学矣、入帆足万里門、夙以才藻称。後游東肥、学医于田中司馬、日夜厲精業大進、為一塾都講。尋、歸郷里、開業于家、乞治者滿門。当時延岡藩命為郡医也。先生為人、謹嚴常好讀書、博通經史。殊期実践、夙憂世道委靡、竊抱矯風志而、自以為。嘉言正風俗、聖人詩教也。至誠感神明、我國歌道也。然詩教之与歌道、誘庸人甚難令。夫俳諧一種、国風言邇致遠而、俗談平話、易教易修、化俗移風、措之豈有他哉。由是觀之、先生之俳諧迫出時流、不可怪也。其初期独詣致々数年、大有所得。後入京都、師事芹舎翁、居数月、以其所解屢質于翁、々々大口、遂以門賓遇先生。々々帰国、翁語人曰、我俳諧已西。爾來家居涵養不怠、執費者

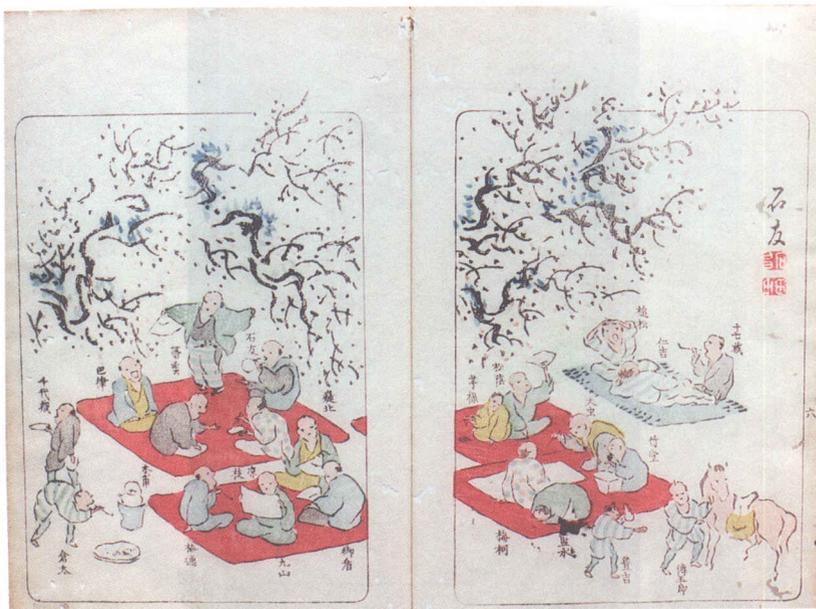


図4

甚多無幾。名聲遠藉，座上之客常聞東奧北越之言語，所謂虎嘯一谷風扇于万里乎。或咎其業不專。先生以不為意，常謂人曰、医者治身疾、俳諧者癒心病、二者一日不可欠、是余所以医而措重于俳諧也。先生与人晤語無論貴賤、輒說俳諧、常強発句。蓋非先生之意欲、以斯道先進、自誇鄉里者果出救時至情乎。明治廿八年六月廿八日、病而卒。年七十一。葬植田村雄城先塋之次。先生平時接人儼正、不喜世俳諧者流好為脫俗之風、而亦有瀟洒温雅之氣、恰如蒼松帶春雲。其宅其園最富風趣、已有園田鷹城花儒園記、世人所知也。先生死之日、道路相弔、知不知無不攢眉者。明治卅年室渡辺氏死、次息胖、三男岳三、同以卅一年没、翌卅二年冢子弼亦卒。先是明治廿五年長女、次女已死。嗚呼自明治廿五年至卅二年前後死者七人、於是一家全尽矣。歲時奉香花者、親戚中独有安東拏雲氏耳。苟有淚者誰不濺一滴哉。仏家所謂備業、談亦非偶然也。今茲先生七周年、故旧門生相謀立碑。余也緇門老頑、世無以文望貪道者、今雖有此囑、不能写先生平生。然則其前言往行、以補斯（傳傳力）口、

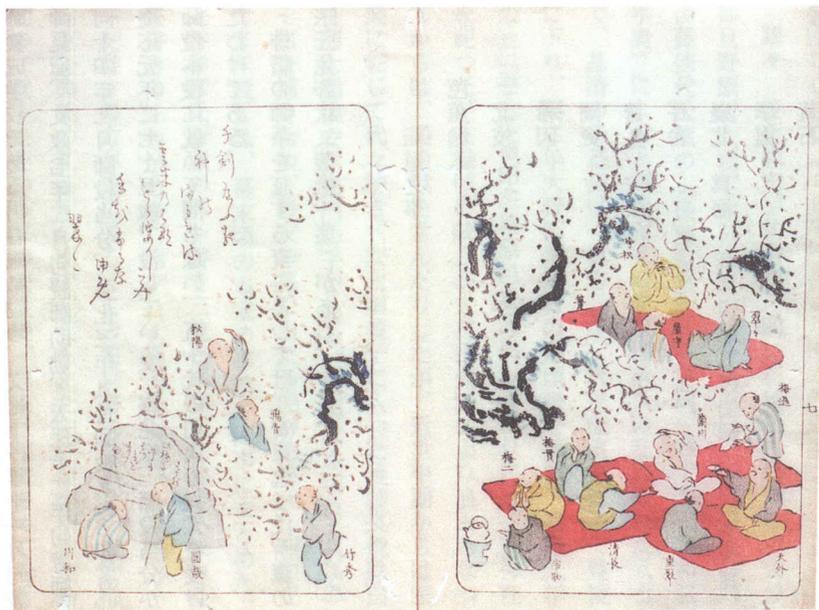


図5

他日識者之任（熊中力）。乃銘曰、

能玩雪月 真俳諧矣 森羅万像

尽供指使 雪月見弄 則是俗史

小技無益 惟名（熊中力）□□ 九嶷七瀬

出此高士 澆季之世 独持道義

明治三十五年壬寅三月上浣 相馬城陽梁撰并書

笠木嘉・鐫

長い碑文は、多くを伝える。疑北はまず、豊後の竹内

豊州・帆足万里について漢学を修め、次いで肥後の田中

司馬に医学を学んだ後、帰郷して開業し、郡医ともなる。

一方、俳諧に親しみ、京都に上つて芹舎の導きを得、帰

西の後、芹舎に「我俳諧已に西せり」とまで言わせる。

帰郷後は、俳諧の教化的価値を信じて鼓吹に努めたが、

常の俳諧者流が脱俗を気取る風を避けた。逝去の前後に

家族全員が病没し、一家は滅びた。

右を裏づける一、二の資料が存する。まず田中司馬に

ついては、熊本県立図書館蔵『先祖附 医の部 南東五

七』に見える。田中司馬家の四代目として、熊本藩の医

師養成学校である再春館に勤め、文化十二年十一月句読

師見習、文政七年二月句読師助勤、天保十二年句読師、

同十四年二月師役当分、弘化三年九月師役本役となり、

慶応元年に七十五歳で没している。疑北は、師役当分か

師役本役に就いて間もない、五十代の司馬の教えを受け

たわけである。

俳諧の師系を証する資料としては、安東逸子氏所蔵の

宗匠免許状（懐紙一葉）がある。

伝道之事

芭蕉翁

北枝

希因

闌更

蒼虬

芹舎

疑北 真海

拏雲

黄石

右今般入門三付、伝之者也。

大正七年七月

桃園（朱印）

黄石雅丈

芹舎は、花の本七世を名乗つた著名な俳人（八木氏）

明治二十三年没）で、右の俳系は由緒正しいものと言え  
る。拏雲の名は先の疑北の顕彰碑に見えており、疑北が  
芹舎から継承した俳系は縁者の拏雲に伝わったのである。

拏雲は、俗名を安東貞一郎と称し、別号桃園。朝鮮京城  
（現ソウル市）に渡り、昭和二年には『桃園夜話』と題  
する俳話書の出版もしている。右の伝授は、その渡鮮の  
前に行われたと考えられる。黄石は安東永太郎、横瀬の  
庄屋の家に、画才あり大塚富吉著『大分県画人名鑑』  
にも見える。昭和九年没。右資料の所蔵者は、黄石の曾  
孫に当たる。真海は疑北の別号で、顕彰碑の傍らに立つ、  
「雲の峰小町か歌に崩れけり 疑北」の句碑に「真海書」  
と小さく刻むのを見ると、書に際して用いたようだ。疑  
北はまた、嘉永四年、自邸内に「梅が香に」の芭蕉句碑

を建てている（川上茂治著『九州の芭蕉塚』）。

翠々 後藤静安。幼名司、別に石城とも号する。大分

郡且野原村（現、大分市且野原）の医師。生没年未詳。

後藤佳代氏蔵の『後藤家系図』（仮題、卷子本、享和三  
年奥）によると、後藤家の先祖は承久の乱に破れた武士

で、基清の子基長は、貞応元年、大友能直に仕えて豊後  
に下り、同二年大野郡東岡村の地頭職を拝領、嘉禄元年

（二三丑）に植田庄壇原邑を開発して移り住み、天神社  
を祀った。文禄頃の統長が大友氏失脚により浪人となつ

てからは、鍛冶職を営んだりしたが、近世中期からは医  
業に転じて代々続き、安永頃養子に入つた後藤良悦は白

杵藩士稲葉安左衛門の子である。系図は途切れるので、  
それを補うため、静安の孫に当たる泥谷徳市氏（昭和三

十二年没）は、幕末頃の当家の事情を記事にまとめた。  
泥谷孝彦氏所蔵のペン書き三枚と系図末に書き込まれた

墨書きの二つがあり、いずれも徳市氏自筆、ほぼ同文、  
ペン書きの方が先に成る。この由来書によると、静安は

稲葉公典葉の江藤家の出で、妻もまた白杵藩士稲葉茂衛  
門の二女トモという。静安没後、同家は相続をめぐるも

め事から財をねらう者の介入を招き、たちまち破産に至った。寒田にある法雲山西福寺（真宗大谷派）の西藤真住職の示教によると、同寺の庫裡が、明治初年頃の後藤家倒産の折りに買い取った遺構で、玄関左手に調剤室の形が残る、という。今も繁栄をしのばせる大きな構えである。

**石友** 安藤伝左衛門。通称伝蔵、七香園の他に白紙関吏の号がある。大分郡松岡村（現、大分市松岡）の醸造などを営んだ富商。文政七年九月十八日生、明治二十五年一月十五日没。行年六十九歳。墓碑は菰田字梨ノ木の山上の旧墓地にあり、表に「七香園積石友」、向かつて右の側面に「明治廿五年一月十五日頽齡ノ六十有八逝同年二月建碑」と刻む（図2）。その業績は、久多羅木儀一郎著『鶴崎市史人物篇』（昭和三十二年）に詳しく、画も好くした多彩な人で、俳諧では芭蕉句碑七基の建立、芭蕉二百回忌の供養、また明治二十年からの活版による月刊俳諧雑誌『風月睦句集』の発行など、盛んに活躍した。吉野天満宮の「此梅に」の芭蕉句碑にも「安政六年春三月 石友建之」とある。この観梅の催しがあったの

は、石友三十八歳の春、開催から本書の刊行にいたるまで、中心になって動いたことだろう。注意すべきはその俳系で、『鶴崎市史』には「年少うして俳諧を鶴崎の鏡朝翠に学んだ。のち大阪の八千房淡叟に学び」とある。三人の主催者に次いで、雅遊の参加者の内の判明した人について記す。

**松陰** 釈賢齡。相馬氏。字恵龍。松岡の飛龍山淨雲寺（浄土真宗大谷派）第十九世住職。弘化元年十月十三日生、明治十八年六月二十九日没。行年四十二歳。『鶴崎市史』によると、広瀬林外等に学んで詩才を謳われ、画は平野五岳と論じ合うほどで、宗務にも優れていた、と言う。疑北の碑文の撰者相馬城陽は松陰の弟である。

**吟松** 釈龍潭。東光氏。静観院とも号した。海部郡関村（現、北海道郡佐賀関町）の東光山徳応寺（浄土真宗本願寺派）第十世住職。文化六年生、明治十四年十月十三日没。行年七十四歳。境内の墓碑は、表に「当山中興ノ了達院釈龍潭法師之墓ノ十世之住」、向かつて右の側面に「明治十四年辛巳ノ旧曆十月十三日逝」、台座に「幸之浦世話人」と刻む。この人についても、『鶴崎市史』

は多くを割いている。広瀬旭莊・長三州等多くの著名文人と交わり、『梅墩詩鈔』の詞書にもしばしば名を見せ、一方で狂歌を詠み、俳諧は八千坊の印可を得て、門人も多かつた、と言う。今も残る龍潭の記録『人物誌』（巻三のみ。元治元年）は日記体で、石友や後述の呉石に止まらず勝麟太郎・坂本竜馬なども登場させ、佐賀関に次々と入港する黒船の雄姿を筆でスケッチして、時運を写している。

**御盾** 名録に記すように肥前小城の画工で、扉の口絵を雨耕の画名で描いている。龍潭のもとに身を寄せていたと思え、『人物誌』十一月十日条に帰郷のことを記す。

**九山** 旦野原の東光山妙林寺（浄土真宗大谷派）第十二世住職。『妙林寺過去帳』に、「第十二代ノ受樂庵釈諦念ノ明治二十一年正月十一日寂」と見える人であろう。底本に「明林寺」とあるのは「妙」を「明」と誤つたもの。この寺は、明治十二年春に富岡（現、大分市富岡）に移転している。

続いて、当日不参加だった人についても略記しておく。

**呉石** 荒金儀八郎。速見郡別府村（現、別府市内）

の富商。この人については、つとに『別府市誌』（昭和八年）が一節を設け、近くは入江秀利著『天領横灘ものがたり』の「萩（たばこ）屋物語 横灘一番の富豪」（初発表は『別府史談』一〇号）に詳述されている。詩書画いずれにも長じ、多くの人々と交わつた。俳諧は二十七八にして八千坊屋烏から所恩亭伍尺の号を印可され、弘化四年夏、六十三歳で立机した、と言う。墓碑は別府市の野口墓地（南の市役所に近い辺り）に立ち、表に「釈淨誓」、向かつて右の側面に「明治二年己巳六月五日」、左の側面に「俗名荒金儀八郎通直ノ行年八十五歳」、裏に「旅人をうらやむ日なり春の風」の句を刻む。裏面については句の左の小さい六文字が難読で、次の行には「若空桑署」とある。空桑は著名な文人の毛利空桑で、深交した呉石のため筆を執つたのである。

**蘭什** 宮本勇八。大分郡鶴崎村（現、大分市内）の塩飽屋と屋号する富商。明治七年十二月十八日没。行年八十六歳。『鶴崎市史』は、俳系は鏡朝翠門下だろう、とする。

南耕 『鶴崎市史』は葛城精一郎とする(三七〇頁)。

○

これまで出句者の素顔をたどつてきたが、右と巻末の名録の記事を思い合わせる時、その空間的拡がりに驚く。吉野天満宮から東北方の佐賀関まで二三キロメートル、西北方の雄城村まで一五キロメートルある。これは直線距離だから、実際の歩行距離ははるかに長いものとなる。さらに興味深いのは、豊後地方の各藩の所領が細分化され、きわめて複雑に入り組んでいることである。関連の地名と所領の別を示してみる。

幕府領(肥前島原藩預地) 大分郡松岡村・乙津村

(現大分市乙津町) ・速見郡別府村。

白杵藩領 丹生(海部郡岡村・誓願寺村、現大分市

丹生) ・丹生屋山(海部郡屋山村、現大

分市屋山)。

府内藩領 大分郡萩原村(現大分市萩原)。

肥後熊本藩領 佐賀関・鶴崎村。

日向延岡藩領 大分郡旦野原村・津守村(現大分市

津守) ・曲邨(本曲村・今曲村、現大分

市曲) ・片島村(現大分市片島) ・雄城村。

(因みに、種田というのは大分川とその支流の賀

来川・七瀬川の流域一帯をいう古名である。)

雅遊に集う人々は、この五つの所領から出かけていた。境界もあつてなきが如くである。ここに、幕末の豊後地方の人的交流の自由さが認められる。

今一つ指摘したいのは、俳人たちの俳系の問題である。右に見ると、石友・吟松・呉石の三名については、大坂の八千坊の系譜にあるとされている。八千坊系の宗匠の曳杖もあり、この流派が豊後に浸透していたことは、大内初夫著『近世九州俳壇史の研究』の説くところであり、大坂に近いことから大いに納得がいく。しかし一方で、巖北がわざわざ京に上つて芹舎に学んだことを注意しなければならぬ。梅室書による芭蕉句碑が続々と建つており(天保十三年に日田永興寺、弘化二年に別府西法寺、嘉永五年に玖珠町北山田)、豊後に、花の本流の俳諧が広まっていたのは疑いないからである。この八千坊系の俳壇が花の本流に塗り替えられるという現象は、私がかつて肥前唐津藩領の俳壇について指摘したことがあり

〔佐賀の文学〕、これと重なり合う。本書の中に、中央の宗匠の名を全く見ないのは、新しい俳壇の様相を示すものかも知れない。また疑北が「世ノ俳諧者流ノ脱俗之風ヲ為スヲ好ムヲ喜バズ、而シテ亦瀟洒温雅之氣有リ」と評されたのは、この問題に示唆を与えるようでもある。

従来の行脚俳諧師から与えられる高踏的な求道者めいた気配が避けられ、より日常生活に溶け込んだ俳諧を求めようになる。また、淡々の流れを汲む八千坊系に言語のおかしみを求める傾向がつよいのに比し、花の本流は外界をより感覚的に写そうと努める。この二つの流れが、次第の一つになりながら近代に入っていくのであろう。

右に見た俳人の集団は、寺院の住職や医者・富商を中心にする。これに庄屋たちが並ぶだろう。いわば地域の文化のリーダーであり、その周辺の人達を牽引して地方文化を築いていく。豊後は周知のように多くの学者・詩人・画家を輩出した。その影響を受けながら、集団の文化レベルはより高まる。本書の醸す大らかな明るく楽しい雰囲気、その開放感、時代のあり様と豊後の地域性との両面から考えられる。

本書は配り本と思えるが、多めに刷ったらしく、架蔵本その他にも数点が伝存しており、地方俳書としては多い方である。ここで最後に、配った折りの添え状を掲げておく。故大内初夫氏所蔵本の見返しに貼付されてある、一枚の刷り物である。

暖和之節、愈御安逸奉寿候。然者辺土之観梅を、こがましく小冊に致、奉懸御眼候。御一笑被下度（候）。  
尚御近什御漏之程、奉待候。不一

二月

疑北

翠々

石友

并

買初や兼て望の土佐日記

うしろから覗くもしらぬ接穂哉

岩が根や雫集めて春の水

疑北

柿喰た声とは聞ず初鴉

落さしに突て手毬の上手哉

瓶ぬけば根の出来てある柳かな

翠々

吹事を風の忘れし子日哉

はらばふて見る釣合の柳かな

古里や只四角なる昏鶯

石友

御評可被下候。

「辺土之」の文字から、上方などへも送られたことが窺える。

凡例

一 漢字は、新字体・正字体など通用のものに改めた。片仮名書きの助詞などは平仮名に改めた。

二 平仮名には、私に濁点を付した。

三 散文また詞書については、原本の改行を無視し、

私に句読点を施した。

翻刻

雲米与之野

煤吉野

華儒園

豊后松筠園編

七香園

「見返し

〔梅樹の挿し絵・図3〕

辛酉春日

雨耕（朱印）

神斬虹竜化梅樹 千年老幹將生鱗

東風吹碎領下玉 満作枝頭万点春

青海漁夫 嶷北（朱印二顆）

豊後ノ国海部ノ郡吉野ノ里天満宮ノ社頭ニ、老梅樹一株

アリ。東西百尺、南北六十尺、幹枝屈曲シテ竜蛇ノ蟠レ

ル形ニ似タレバ、号ケテ臥竜梅ト云。又、土俗、是ヲ捻ネテ

梅ト称ス。老幹恰毛腐レタル繩ノ如キガ故也。幹ノ地ニ垂タル処ヨリ再ビ根ヲ下シテ繁生シ、モトノ幹ハ星霜ヲ経テ枯槁セシガ、近キコロ半ヨリ朽ハナレテ、今ハ二樹ノ如クナリシニ、旧時ノ容尚存セリ。実ニ稀世ノ一奇樹ニシテ、花時ノ清賞比スベキモノナシ。吟詠画図ニ遊バシ人ハ、山溪ニ杖屨ノ艱ヲ厭フコトナカレ。

## 回 章

新禧芽出度奉祝寿候。然者、当年者何方も梅花氣候早く相覚、吉野臥竜梅も嘸哉と被存候。折節、大虫・木甫の両子も滞留の事故、来ル十七日、彼地逍遙相催度、諸君被仰合、早朝より御出懸被下度、当日の定、左ニ申上候通、兼而御心得可被下候。

一御出杖の節御誘ひ合待合せ等、すべて遅刻の基たるべく、思ひく二出かけ可申、其中には又御同道も有之、或ハ途中より連立二オなど、一定ならざる所、亦、漫遊の一興と存候。

一当日雨天八日送り、其外に延日無之、万一不慮の御さし支八、御銘々のご不幸たるべく候。

一各、御手弁当一日の飢を凌ぐばかり御用意可被成候。そへものも同様ながら、若、美味を見懸候へバ、脇より助箸も可有之、御油断被成間敷候。

一酒ハ醉を尽すを好まず候へども、先、御分量より聊余分ニ、瓢なりとも樽なりとも、御銘々持の事。

但、終日梅花の句無之人ハ、風雅の罰として、帰路の明樽②残らず提させ可申候。

一肴ハ先、弁当の余分にて事足可申、其中ニも「二ツ佳肴の一ツも御持参の人ハ、当日上席勿論の事。

一帰路、夜に入候を御苦ミの方ハ、人先へ御引取御随意。尤、月夜ハ御存の事ニ候。

一俳外の人たりとも、志有之バ御伴可被成候。併、婦女と児童ハ帰路の煩なれば、御見合可被成候。

右、急々御回達可被降申候。

(其口上)

正月

発起 巖北

翠々

石友

名列略之。

「三オ

万延辛酉の春睦月十七日の空麗にして、氣候初て暖に、柳ふく風さへ静なれば、けふの観梅を期したる人の誰かは是をよろこばざらん。況や吟松はきのふの朝けに佐賀ノ関をたち出て、肥前人御盾と杖を並べ、松岡なる七香園まで七里ばかりをはせ来りて、弥陀の称念も一日の晴を祈るより他なし。萩原の天外・梅逸、未明に発して松岡連に加はりぬ。梅柯・梅遜は途中に種田連を待ながら、かしこに心の引るれば、足おのづから早かり。宗方倚松庵、留杖の木甫、暁天に花儒園の扉を敲くに、疑北が弧山の夢やぶれて、雄城の<sup>ヨウキ</sup>田の面にあさる鶴も、けふの友に携たしなどつぶやきながら、壇原を過れば、翠々は九山・梅二をいそがしたて、はや道のべに待つけたり。或は四五里、或は二三里わけ入、道はさまざまにわかれたれど、高根にながむる月ならでも、梅にむかふの気先ひとしく、支度そこくととのへて、大虫・石友の一群は藍水・半助の足はやきを呼かけ、清長・一簣のおくれたるを顧みながら、戸次市に到れば、屋山の帯雲はやく爰に出張たり。鶴斑といふ馬にまたがりて、涼枝・屋守これに従ふ。大虫が例の足下手も芋祿が鼻笛になく

さめ、竹堂・秋陽は杜詩など諷ひながら、野を過、山を過、道より鶴崎の竹秀に伴ひて、やゝ梅下にいたりつきぬ。

梅は十分に咲みち、香気馥郁として花神もけふの遊宴を饗することく、感賞の声は、山とよむばかりなり。種田の梅貫、臼杵より帰るさとて席に入、疑北・翠々いたりつくやいな、梅のあるじに盃まゐらせむと、はや瓢どもふり立れば、おのゝ豪氣百倍して腰兵糧ひきちらすに、美肴のたしなみ多くありて、前日回章にいひふれたるも、誰し上席ときだめがたく、尊を忘れ卑をおぼへず、老たるわかき入みだれたり。書画吟詠おのゝ筆をとりて、雲煙竜鳳筵に満ち、盃盤狼藉たるころ、松陰・蘭州・円哉来たりぬ。乙津の大きさはる事ありて、川和は其名代なり。曲邨<sup>マクリムラ</sup>の鴉青、豊前人巴律をいざなふに、重翠は道踏たがへて、おくればせに駆つけたり。さりしころ石友こゝに祖翁の句碑をいとむ、呉石筆を染て、牛もはつ音の金声をとむ。けふは必と前日別府よりのおとづれありしに、何事のさはりにや、老の顔のまじはらざるをたれかれも惜みあひぬ。又萱邨が病の枕もたげ

て、人々の出たつ姿をうらやましげに見おくりし其心の  
ほどを、かへすくもいひ出たり。此外にもけふを約し  
ながら、はからざる公事・疾病のためにさまたげられた  
る、尤すくなからず。着到すべて三十二人、奴僕七人、  
終日の歡樂、詞章のくさく、むなしく反古堆<sup>51</sup>に終ら  
むより一集にもせむとなり。是、しかしながら流風の  
余韻を世に遺すべき志にはあらず。たゞのちくくのおも  
ひ出草なり。作の龜朴なるは、漫遊酔吟のつねなれば、  
たまく見ん人もあざけるべきにはあらしかし。

折臂回身還屈膝 仙姿玉骨春心密  
樹枝皆学得蘇張 恰若連橫合從術

松陰

客圍樽酒好題詩 樹得天工自出奇  
老幹臥筵都不俗 窺人黃鳥蹴南枝

竹堂 〔57〕

枝々錯節冒莓苔 一樣三株爛漫開  
野外含情高士臥 雲間帶意美人來

宴及月出  
梅月夜出

秋陽

あかつきをおばえぬはるのねぶりさへ  
さむるばかりにかよふうめが、

御盾

坂越た汗を梅へのみやげ哉  
折おとにかくるうめの句哉  
たましひの句にたつや神の梅

大虫  
藍水  
木甫

梅は只空を根にして匂ひけり  
かまねはならぬ梅なり注連の内

吟松  
帶雲<sup>61</sup>

〔見開きの遊宴図・図4〕

（右面は、「石友（朱印二顆）」の落款、赤毛氈の  
上の四人に「松陰・芋祿」「大虫・竹堂・梅柯・  
藍水」、筵の上の三人に「槌松・仁吉・十七藏」、  
立ち姿の二人に「伝五郎・豊吉」の説明あり。  
左面は、赤毛氈の上の九人に「石友・帶雲・巴  
律・木甫・涼枝」「寢北・御盾・九山・梅逸」、立

ち姿の二人に「千代蔵・倉太」の説明あり。

〔見開きの遊宴図・図5〕

〔右面は、赤毛氈の上の十一人に「吟松・翠々・

屋守・一簣」「梅遜・蘭州」「天外・重翠」「梅貫・

梅二・清長」、かがむ一人に「半助」の説明あり。

左面は、梅林の中の三人に「秋陽・鴉青・竹秀」、

芭蕉の「此梅に牛も」の句碑の前の二人に「円

哉・川和」の説明あり、左上の余白に、次の和歌

一首を添える。〕

手剣やぶる神のまもれる雲米のはな

をらばかしこみ手をふるなゆめ

翠々〔8才〕

下駄ぬいで通る橋ありうめの花

地に臥てにほひを空に有米の花

柏手も心してうてうめのはな

どの家も朝飯遅し梅花

水音のました谷間や梅花

捻梅は自在の神の威徳哉

涼枝

屋守

竹秀

天外

川和

七十四歳 巴律

見尽した帰りも梅の噂かな

瓢箪も世に出初けり梅花

鈴の音のやまぬ社やうめの花

梅がゝのしづめて廻る一座哉

野の家や人まで梅に似たそだち

よき日南持たる梅の小家かな

星見えて暮る間のありうめの花

一日になじみのつくや梅花

芳しき影こぼれけりうめの花

黒々と人もけしきや梅花

見えてからまだ里深し梅花

さくらより手近き煤の吉野哉

半助で出るを梅見の自慢かな

これほどは思がけなしうめの花

またがりつ潜りつ梅にひと日哉

捻れたる姿をうめの老木哉

又梅をめぐるや酔の又醒る

丸山

蘭州

円哉

清長〔8才〕

一簣

重翠

鴉青

梅遜

梅逸

梅貫

梅柯

梅二

半助

少年 芋緑

〔9才〕

巖北

翠々

石友

ひと本をさながら梅の林かな  
 藁屋まばらに冴かへる丘  
 校<sup>カサ</sup>縵の色あたらしく猿曳て  
 御箸のついたあとをいたゞく  
 飛石に白目をこのむ月儲  
 芭蕉のこらずさん<sup>ん</sup>くになる  
 寺屋から放し鳥ほど未<sup>ひる</sup>刻<sup>カ</sup>上り  
 阿闍梨を通す道のきびしさ  
 着こなしに借羽織とは見えぬ也  
 最一度寐間へすゑる別れ端  
 月のある内と納涼を契るらん  
 ぼちく<sup>く</sup>咲は菱か田<sup>カ</sup>字<sup>ツ</sup>草<sup>ミ</sup>か  
 指の皮摺むく駕の燧石  
 先<sup>シ</sup>手が勝になりし商ひ  
 流もなき文字の極<sup>ツ</sup>た俵<sup>バ</sup>じ<sup>バ</sup>し<sup>シ</sup>るし  
 あたらぬ棒に声立る犬  
 茸替の邪魔とむぎく<sup>く</sup>花折て  
 冬から見れば倍も永き日  
 今来よといふはたしかに試茶

大虫

大虫	藪潜りたる鬚が横むく	九山
石友	稽古矢の面目もなきそれ所	梅二
巖北	西に成たり南風に成たり	半助
翠々 <sup>ニウ</sup>	生死もしらず海月のふうはく	蘭州
帶雲	こぼれかゝつた腹で順礼	円哉
吟松	人中で愚癡のありたけさらけ出し	竹秀
清長	年わすれとは酒の名目	鴉青 <sup>ウ</sup>
一簣	炭挽に此鋸はをしいもの	巴律
梅柯	下部つかひもさとき檢校	重翠
梅貫	右一順を帰杖のみやげとせしに、あな	
天外	たこなたへ引はりあひ、なほ其韻を次	
梅逸	て六々の数にみたしめて返しこしぬ。	
梅遜	月蝕をかくすは雲も憎からず	萱郵
涼枝	こゝ廿日ほど稲の氣遣ひ	為樵
屋守 <sup>ト</sup>	四手うつも若手まさりの九十九髪	兎白
芋緑	水張つておく雑炊のあと	喝石
木甫	雨漏と鼠の尿のまぎらはし	雪曹 <sup>ト</sup>
藍水	腰折ひとつまとめ兼けり	白鳥
川和	もろこしの吉野も花の春なれや	呉石

海部郡に霞む人声

丘鳥

当日、発句のみよせられし人々。

七香園主が祖翁の句碑をいとなまれた

るよしは、いぬる己未の花供養集に予

がひと言あり。其ちなみある梅のむし

ろにはづれし老の杖の甲斐なきを悔て

うつむくや梅の面影まのあたり

別府七七豆 吳石<sup>11</sup>ウ

白梅やまだ冴返る山の鐘

丘鳥

しらうめに一声なくや夜の鳥

白鳥

梅明りするや流もにほふほど

府内 正六

ねじれたる梅香はしる吉野哉

狙彦

寐るのみになりて客あり梅の月

梅雄女

八千代ふるこゝらは梅のよしの哉

大住 鯛郷

小部乙津の梅にあふつや日入前

大分

澄遂る朝空寒し梅花

王ノセ 白鳥

菟弱の小皿に氷る梅見哉

モリ 碧水

数多くみゆる苔や雨の梅

馬に乗るうち預るや梅華

梅さくや暮て迄聞鳥のこゑ

庭先を廻る水あり梅花

一藪は吹こす梅の匂かな

宵月の久しう見えて梅華

遠くより見て来る鳥や梅花

梅はたゝ白きが上の月夜かな

うめが香をなめて声張る小鳥哉

何風も当るところやうめの花

梅がゝの毛穴にもしむ心地哉

梅白し月又白し明の空

苔の香は別にある也雲米の花

神の地にふしてゆたかや梅花

綿入をして月の入うめ見哉

山川を受けて奥あり梅華

尊さに折枝のなし神の梅

餌を蒔て梅を退せる小鳥哉

宮守の落付顔や梅の花

竹香

月舟<sup>12オ</sup>

井ノ飛川

南耕

ヨコ尾 香雲

雨新

鉄舟

ハル浦 伴松

花溪

松鳥

柳翠

逸翁

竹中 桃泉<sup>12ウ</sup>

キタト雲

鶴崎 蘭什

蓉鏡

光吉 陸沈

中村 清泉

マガリ 逸民

ふところに香のあふれ込梅見哉

世の智慧は捨た人なり梅の客

梅が、や柴で汲たる矢立水

梅咲てこゝ迄けふのにほひ哉

石垣に草は生けりうめの花

さそはれつさそひつけふの梅見哉

粥腹のぬくもりを来て梅見哉

白梅や寐迷ふ鴉啼すゞめ

山寺や折敷にのするうめの花

朝々によぎ枝出来て梅の花

似た橋に似た家のあり梅の月

水は田に梅は畑に夕明り

山里やどの道来てもうめの花

梅が、や寒い所に小酒盛

梅にさへ不沙汰するほど老にけり

浦の夜は梅に明くとも定まらず

しつかりと夜に入梅の匂かな

鐘の音をよそに聞けり月の梅

梅が、や矢狭間をもれて広うなる

柳圃

寒田 喝石

雪書

雪虎

梅逸子八才 小虎 13才

一的

津守 兔白

花ツル 梅敏

宗方 為樵

雄城 千丈

セリ 梅月

クハ本 梅彦

ワサ田市 梅宇

松岡七十七 聊且

雨蓬 13ウ

是空

竹潭

敲月

咲た樹は見えねど梅のにほひ哉

人の居ぬ門にも梅のさかり哉

山深く野深くうめのかをり哉

花活の見くらべもなし梅もらひ

予は病床に臥て嘆息の額を撫ながら、又

おのくの帰杖を待て漫遊の趣を聞ばや

とねがふまゝに

葉にはことばの花ぞ梅狂ひ

萱邨 14才

九青

糸屑女

糸女

竹裡

発起みたりの英傑をいにしへに擬せば、桃園の華兄弟ともいはむ歟。幸ひ、よし野の臥竜先生、此国の風雅をいつまでも補佐したまへや。

大虫老人(印)

14ウ

出杖名録

松陰

松岡、浄雲寺主

竹堂

浄雲寺弟

秋陽

筑後久留米、僧 寓浄雲寺

御盾

肥前小城、幽士 壺氏、号雨耕

大虫 摂津御影、遊客

木甫 信濃飯田、遊客

帶雲 丹生塚山、杉崎松太夫

屋守 丹生、杉崎佐一郎

天外 萩原、白露庵主

巴律 豊前高田、謡曲師安達氏

蘭州 浄雲寺塔中高徳寺主

清長 松岡、中尾馬之輔

重翠 植田、安東十郎

梅遜 津守、橋本慈八

梅貫 植田、利光庄助

梅二 植田、安東松七

芋禄 石友弟、卯六

翠々 日之原、後藤静安

藍水 阿波徳島、遊客

吟松 佐賀國、徳心寺主

涼枝 丹生、藤津四三郎

竹秀 鶴崎、本郷礎石衛門

川和 乙津、柏原和太郎

九山 日之原、明林寺主

円哉 浄雲寺徒。 15才

一簣 松岡、安東龍太郎

鴉青 曲郭、首藤耕平

梅逸 萩原、馬見塚清太郎

梅柯 片島、津末其太郎

半助 伊予人、來住松岡

疑北 植田、安東玄達

石友 松岡、安藤伝左衛門

疑北侯 倉太 翠々侯 槌松

石友侯 千代藏 都計三十九名

豊後大分郡花儒松筠七香三園台梓 15ウ

本稿の執筆に際しては、多くの方のご教示を得た。疑北については大泉禅寺三ヶ尻玄幽住職、安東博積・逸子夫妻、永田真理子、翠々については西福寺西藤真住職・後藤佳代・泥谷孝彦・泥谷トミ・大竹トヨ・甲斐キミ子、石友については安藤高德、松陰については浄雲寺相馬温住職、吟松については徳応寺東光爾英住職、九山については妙林寺大柴迦葉住職、呉石については衛藤秀子、の皆さんである。また本学の安東大隆教授から県内の寺院について、後藤重巳教授から文書類についてお教えをいただいた。すべての方々に厚く御礼申しあげる。永く心にあつた吉野梅林が、本学国文学科に席をいたたくことで、はからずも近いものになった。感謝をこめてこの一編を終える。(本学教授)

浄雲寺侯 豊吉 菅葉侯 伝五郎

吟松侯 仁吉 鴉青侯 十七歳